



八戸市（青森県）

女性議員が1人もいない「ゼロ議会」の割合が全国 47 都道府県の中で最も高い青森県で、過去 24 年間、選挙のたびに女性議員を増やしてきた八戸市。1999 年にはたった1人だった女性議員は 2023 年には 7 人に。しかも1999年以降に当選した女性議員は全員続投中だ。人口 22 万人の中核市八戸市で、着実に女性議員が増え、彼女たちが議員を継続できる鍵は何か―？

まちづくりから始まった人材育成の取組は、変化を続け、新たなステージに…

八戸市男女共同参画基本条例が施行され、市議会において男女共同参画都市宣言を全会一致で決議した 2001 年以前の市の審議会における女性の登用率は低く、政策決定過程への女性の参画が乏しいことが課題であった。このような状況に鑑み、「市における政策又は事業者における方針の立案及び決定に、男女が共同して参画する機会が確保されなければならない」という同条例の基本理念のもと、女性の人材育成事業「はちのへ女性まちづくり塾」が始まった。市の主要な施策や行政改革、議会制度等について学び、議会の傍聴や市長・市議との意見交換も実施するこの塾は 7 年間連続で実施され、91 名の修了生からは審議会委員も誕生している。2008年には八戸市の審議会女性委員比率は 25.6%まで向上した。八戸市が目標としている「30%を下回らない」には届いていないが、修了生の中から各種審議会で活躍する人材を輩出するなど一定の効果が認められたとして、市は「男女共同参画支援事業」の開催に移行した。企画力・発言能力等を身につけ、幅広い人材の育成を図ることを目的に、起業へのきっかけづくりや就労支援を主な内容とした各種講座を男女混合で実施したが、職場等における女性の地位向上促進や今後を担う世代の育成が急務と考え、2010年からは再度女性のみを対象にした「女性チャレンジ講座」を実施することになった。

お話を伺った皆様（敬称略）

*肩書は
ヒアリング当時

八戸市議会議員： 伊藤 圓子
豊田 美好
藤川 優里
苫米地 あつ子
八戸市総合政策部政策推進課
参事(政策推進グループリーダー)：
小田 弘行
八戸市総合政策部市民連携推進課
参事(男女共同参画推進室長)：
間 砂織

2023 年に第 12 期を迎えた「女性チャレンジ講座」は、職場など、様々な場面において女性の活躍と積極的登用を図ることを目的とした、2 年間全 14 回の連続講座である。平均年齢 37 歳の女性約 50 名が参加し、講義や関係機関の視察、グループワークを通じて多面的なスキルアップに取り組むとともに、業種を超えたネットワークづくりを通じて職場や地域社会での活躍のチャンスを広げる。講座の最後には、参加者がグループごとに企画提案をするが、それらの提案が市の事業のヒントになったこともあるという。



女性チャレンジ講座の様子

出所：八戸市総合政策部市民連携推進課より提供

チャレンジ講座修了後、転職した人、起業した人、市民活動を始めた人など、様々な方がいる。男女

共同参画推進室の間室長は、「講座を通じて、人のつながりが生まれ、自分から積極的に関わってこういう意識も高まっていると感じます」と話してくれた。修了生からは、審議会委員に就任する人も出ている。「残念ながら女性議員になった人はまだいない。女性が活躍できる様々な場を見つけ出していく。それを継続することが大切」と間室長は語る。

女性の参画するまちづくりから始まった八戸市の取組は、女性の活躍の場を市政に限定せず、あらゆる分野に活躍できるようにと形を変えながら現在まで連綿と、23 年間にわたり実施されてきた。



八戸市総合政策部市民連携推進課参事 間氏（左）
八戸市総合政策部政策推進課参事 小田氏（右）

女性議員を増やす 2 つの鍵

「女性議員を増やすには、女性がリーダーシップを取れるような機会を増やすこと、そのために学びを継続していける場が重要」と現在 9 期目を務める伊藤議員は当時を振り返ってこう語った。「1985 年の男女雇用機会均等法、1999 年の男女共同参画社会基本法、と法律ができたのはいいのだけれども、すぐに変化は起きなかった。どうしたら女性が市議に立候補できるのか。女性がチャンスをつかむことができるような機会が必要であると考えていた」

そんな時に人材育成事業として 2001 年に開始されたのが、先に紹介した「はちのへ女性まちづく

り塾」であったという。まちづくり塾の修了生の中から、NPO など市民活動のリーダーになるといったような、女性の活躍が広がった。女性が行動を起こすきっかけになる学びの場を作ることが重要だと伊藤議員は考えている。

また、現在 3 期目の苫米地議員は、2003年に市が実施した女性模擬議会を見て、自分たちの要望を行政に反映させる方法として、（陳情や請願もあるが）議員に意見を託して議場で話してもらうのが大切であるということに気付かされた。女性模擬議会という学びのきっかけがあったからこそ、自分が議員になった今、支援者の声を市政に反映したいという気持ちで、議員として尽力することにつながっていると語る。

当然ながら、立候補したからといって当選するとは限らない。「男性の理解もそうだが、女性の理解が進むことが必要だった」と伊藤議員は話す。有権者の約半数は女性のため、女性の有権者がどう票を入れるかによって結果が変わってくる。豊田議員もこれに同意する。最初の頃は、「女性が言ったって無理よ」「田舎だからね、女性はダメよ。女性が何とか頑張ってもどんなにやる気があってもダメよ」と言うのは女性で、女性の有権者は女性候補者に対して厳しい傾向があったという。それでも女性議員一人一人が実績を積んでいくと、少しずつ有権者の意識も変わり、「やっぱり女性を（議会の場に）出さなきゃいけない」という声に変わっていった。伊藤議員は、まちづくり塾の修了生たちは市政への参加意識が高く、政治に求めるものが明確であったことから、女性の立候補者に対して、「女性に頑張ってもらおう、支えよう」という機運づくりにも貢献したのではないかと考察する。

このように、女性の市政への関心を高めるような学びの場があったこと、女性議員が実績を積ん

で有権者に成果を示してきたこと—この2つの要素によって、八戸では女性が立候補しようとする意識と女性候補者を応援する空気が自然と作られてきたようだ。

他方で、「今後さらに女性議員が増えるためには、女性が立候補しやすいよう選挙制度そのものが変化することも必要」と伊藤議員は今後を見据えてそう語る。

議会には多様な人がいてこそ！ 女性議員ゼロからイチの変化

「議会に女性議員がもっと必要だ、と誰もが思っているのでは？私が議員になった時代に比べて、今の時代は女性立候補者に追い風が吹いている」と伊藤議員は言う。初めて当選したのは1991年、当時PTA会長として自分たちの声を議会に届けなければと強い使命感を持って立候補した。立候補の際には逆風もあったが、夫の理解があり、乗り越えた。八戸市議会初の女性議員は、議会に少しずつ風を吹き込んでいった。

伊藤議員が議会での禁煙を提案したとき、「なかなか言い出せずに困っていた」と男性議員からも賛成の声が上がり、非常に感謝されたという。議会でのヤジも少なくなり、これまで議会事務局の女性職員が担っていたお茶出しの役割も見直された。女性議員がゼロからイチとなり、風通しが大きく変わったようだ。

それから12年後、2人目の女性議員、豊田議員（現在6期目）が当選。「女性議員が1人、2人と増えていく事で、あっ、変わってきたな、と感じた。初めの頃はむしろ男性議員が気を遣ってくださったこともあり、『女性だから』と意識したことは余りない。今となっては、八戸市議会では各委員会等の委員長、副委員長のポジションの多くを女

性が占めている」と豊田議員もその変化を振り返る。

多様な人材がいてこそ、議会において多岐にわたる市全体の課題に対応できるようになる。「女性だから福祉（の質問）をやらなきゃ、こども（の質問）をやらなきゃではなくて、どんな問題であれ、女性、男性双方の視点が必要。女性がいなければ偏った政策になってしまうため、絶対的に女性議員が必要」と豊田議員は語る。現在5期目の藤川議員は、「立候補を考える女性には是非、女性議員の従来からのイメージである子育てや福祉などの分野における政策立案に捉われず、自分の視点を大切にしてもらえたら良いと思う」と語る。



左から八戸市議会 藤川議員、豊田議員、
伊藤議員、苫米地議員

風通しの良さが女性議員定着の 秘訣？

八戸市議会では、男性議員も非常に理解があり、様々な場面で女性議員の考え方や意見を尊重してくれるという。性別に関係なく互いを尊重し、相談しやすい環境だと、4人の議員は口をそろえた。

さらに、結婚、出産を経て、子育てをしながら議員を続けられるよう、規則や設備面でも議会の環境整備が進む。藤川議員は27歳という若さで父親の地盤を引き継ぎ議員に当選。現在は子育てをしながら5期目を務める。結婚・出産、育児など、

女性のライフステージごとに課題がある中、「女性議員の継続には家族や周りの支えももちろんだが、環境整備がとても重要だ」と話した。女性議員が増える中で、八戸市議会事務局も、休憩室として部屋を使用できるようにするなど、当初の想定とは異なる多様なニーズにフレキシブルに対応し、女性議員が働きやすい環境整備にもしっかり取り組んできた。

コロナ禍でオンライン会議を実施する際にも、事務局がしっかり準備してくれたという。「困っていることがあると相談すると、すぐに対応してくれると感じる」と苦米地議員は議会事務局の努力に頭を下げる。

性別に関係なく、議員間の関係の良さがあり、さらに、議員と議会事務局の距離が近く、議会内の風通しが良い。これが八戸市の女性議員「2 期目の壁」を低くしているようだ。

市長の思いが女性の躍進をさらに後押し

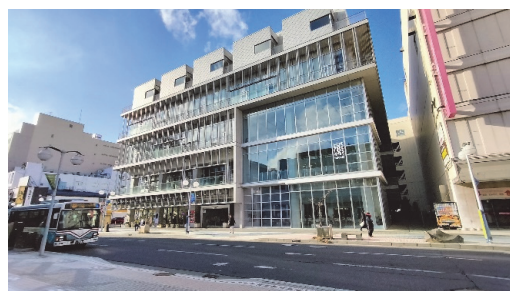
「時代は変わる！共に創ろう！新しい八戸！」を合言葉に、2021 年に市長となった熊谷雄一市長。若者や女性、特に若い女性が市内から出て行くことに危機感を抱いていた。多様な市民、特に若者や女性の斬新な発想を市の施策に積極的に取り入れ、魅力ある地域社会を形成したいという市長の強い思いにより、2022 年に「八戸市まちの魅力創生ネットワーク会議」が立ち上がった。

ネットワーク会議では、八戸市を今より魅力的なまちにしていくための仕組みづくりに向けて、委員 10 名が様々な視点や角度から議論を重ね、市に政策提言を行った。10 名の委員のうち女性は過半数以上の 6 名。その中には前出の「女性チャレンジ講座」の修了生や公募で選ばれた人が

含まれている。「男女比を決めていたわけではないが、気が付けば女性の方が多くなっていた」と政策推進課の小田グループリーダーは話す。

ネットワーク会議では、市で実施した市内の小・中・高校生や保護者を対象としたアンケート調査の結果を共有し、議論に活用することで、若者の意見を多く取り入れた政策提言を行うことが出来た。現在、八戸市では、若者や女性が住みたいと思えるまちづくりに向けて、市民や地域企業、団体等の協力のもと、オール八戸が一体となって取組が進められている。

市長の思いから始まった取組は、女性の市政への関わりを更に後押ししている。ネットワーク会議や女性チャレンジ講座の修了生から女性議員候補が誕生する日もそう遠くないかもしれない。



ネットワーク会議で熱い議論が交わされた
市内中心部にある市の施設「はっち」

女性チャレンジ講座

- 取組主体：総合政策部 市民連携推進課 男女共同参画推進室
- 実施体制：担当1名、副担当1名。講座の運営は外部委託（一部講座を除く）
- 取組時期：2010年プレ講座、2011年正式講座開始から現在
- 予算：170万円/年（委託料120万円含む）
- 成果・実績：12年間で298名が受講

STEP 01 課題発見 どうやって 気づいた？

男女混合事業を試みるも、女性への支援が不十分と再認識

- ・2001年から開始した連続講座「はちのへ女性まちづくり塾」により、審議会の女性比率がある程度向上したことから、2008年から男女混合の人材育成事業にシフトした。しかし、女性への支援が不十分であることに気づき、再度女性向けの連続講座を実施することに。

実施体制構築

- ・主担当、副担当各1名を配置。講師派遣業務は外部業者に委託。（一部講座を除く）
- ・連続講座を長年継続させていくと、テーマや内容の設定が難しく、講師の選定や依頼も少人数の担当部署では負担が大きい。外部に委託できるところを見極め、内容を充実させていくことを重視。

STEP 02 検討・準備 どうやって 進めた？

STEP 03 実施 やってみよう！

子育て中や働く女性も参加しやすい講座に

- ・職場や地域社会で活躍が期待される20代～40代の女性を対象として実施。
- ・5月に受講生を募集。公募とともに、地元企業の研修先として毎年一定数受け入れる。
- ・7月から2月までの間に7回、2年間で14回の連続講座。
- ・講座内容は、スキルアップ講座（5回）、行政分野に関する講座（1回）、グループ企画提案発表（1回）。
- ・講座最終回の企画提案では、2年目の受講生が「より良い八戸圏域を目指す」をテーマに、予算150万円を想定し事業を提案。
- ・受講料は無料。無料の託児サービスも完備し、子育てをする女性も参加しやすい。

スキル向上のみならず、受講生同士のネットワーク構築も

- ・受講生数を毎年半数ずつ募集して入れ替えることで、スキル向上のみならず、受講生同士のネットワーク構築も目的として実施。
- ・市長、関係課職員も出席し、提案から市の施策のアイデアを得ている。実際に、提案をヒントに実施された施策もある。



アンケートによるレビューと講座の継続開催

- ・参加の満足度は高く、スキルアップのみならず構築したネットワークを活用して起業や市民活動を始めた人や、審議会委員に就任した人もいる。
- ・企業からも研修先として評価が高く、毎年継続した参加申込み有り。

STEP 04 今後 この先の展望は？

八戸市まちの魅力創生ネットワーク会議

- 取組主体：総合政策部 政策推進課 政策推進グループ（事務局として機能）
- 取組時期：2022年開始、2023年で一期目終了。2024年からさらに2年間実施予定
- 予算：会議開催費用 1,239 千円(2023 年度)。委員報酬、アンケート調査委託料、印刷費等
提案を受けて 2024 年に実施される事業費 1,342,407千円(17 事業)
- 成果・実績：提言から 13 の取組(新規5、拡充6含む)が2023年に実施された

STEP 01 課題発見 どうやって 気づいた？

若者・女性にとって魅力あるまちづくりを目指して

- ・人口減少という市の課題に対し、若者や女性の流出を防ぐためにも彼らにとって魅力あるまちづくりを進めていきたい、そのために若者や女性から成る会議体で検討を行い、その中で出された提案を施策に生かす仕組みが必要という市長の強い危機感によるもの(市長の公約の1つ)。

実施体制構築：

- ・上記ネットワーク会議委員として、学識経験者、研究機関、まちづくり団体からの推薦者、女性チャレンジ講座の修了生、公募など 10 名を選出(任期2年)。
- ・「若者」を意識して、委員の平均年齢が 40 歳未満となるよう選定した(女性比を意図したわけではなかったが、現在の構成は、女性が 6 名、男性 4 名)。
- ・市の付属機関として位置付け。通常の審議会はある程度出来上がった計画を審議するが、この会議ではかなり自由な設計に。テーマも自分たちで決めて議論し、提言を作成する場とした。
- ・女性チャレンジ講座の修了生枠を用意することで、育った人材の活躍の場を提供すると同時に活用することにした。

STEP 02 検討・準備 どうやって 進めた？

委員を市職員がしっかりサポート

- ・4月～9月上旬の間に6回会議を開催。委員同士の活発な意見交換により提言取りまとめ。情報提供などのため、必要に応じて市の関連部署も参加。
- ・運営サポートや資料の準備は事務局が実施。
- ・提言書の作成は、委員の議論を踏まえて事務局が案を作成し、委員が最終決定。

STEP 03 実施 やってみよう！



実効性のある提言とするために

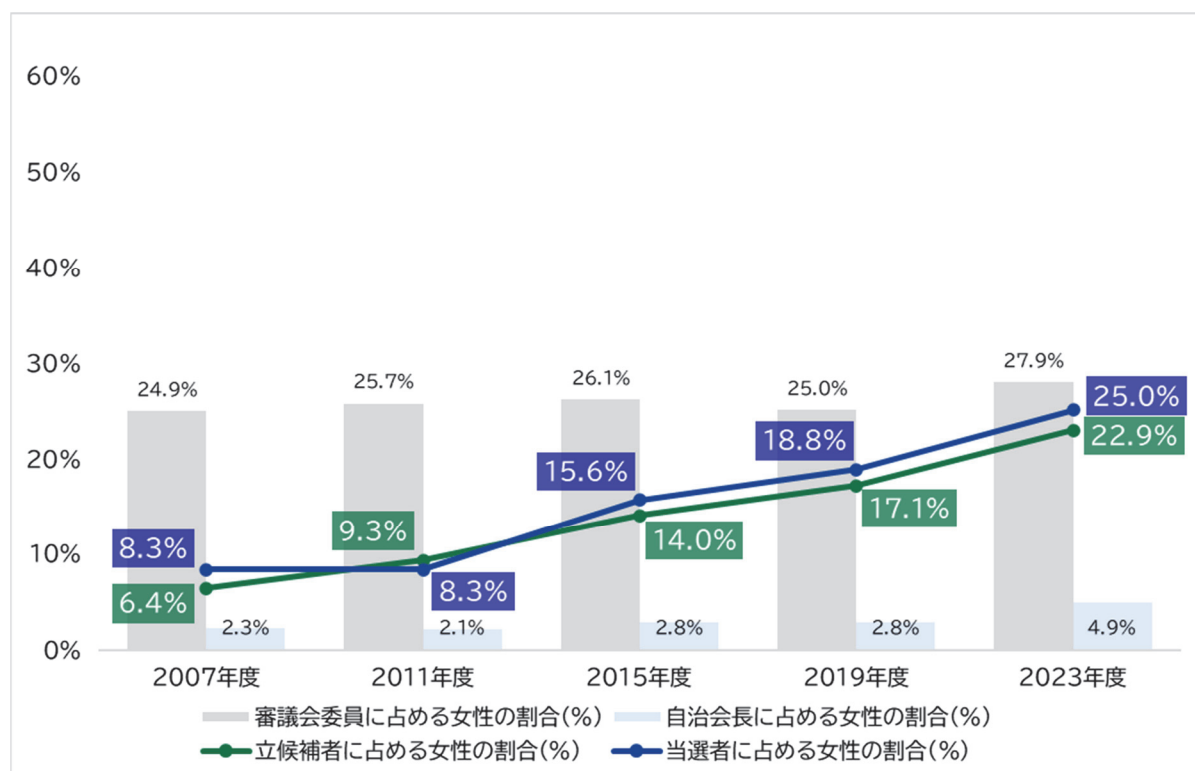
- ・市内の小・中・高校生や保護者を対象としたアンケート調査の結果を委員と共有し、議論に活用することにより、実効性のある提言内容を検討できるよう工夫。
- ・出された提言を次年度の施策に反映させるため、9 月上旬までに市長へ提言書を出すスケジュールで計画を作成・実施。
- ・提言の事業化に向けて、委員と市職員の意見交換の場も設けた。
- ・市長への提言書が出された後に、提言内容に基づき市の各担当課が具体的な事業を検討し、財政課とも相談しながら調整を行うことで、より実現可能性を高めた。

高い提言実現性。事業評価はこれから

- ・2022年の提言の中から実現されたものは、中学生以下の医療費助成(高校生は入院費用)の所得制限の撤廃や公園の美化(草刈り)など 13 件。
- ・会議は2024年も委員を再編成して継続される予定。事業評価はこれから。

STEP 04 今後 この先の展望は？

女性の地域参画・政治参画の推移



出所：アンケート回答、内閣府ウェブサイト「地方公共団体における男女共同参画社会の形成又は女性に関する施策の推進状況（都道府県・政令指定都市編、市区町村編）」（各年度）、選挙報道情報を参照し本調査研究の調査チーム作成

《八戸市基本情報》

総人口：216,596人（2024年3月31日）

男性：103,800人

女性：112,796人

世帯数：109,936世帯

地 勢：総面積 305.56 km²、青森県の南東部、太平洋に面する。

出所：八戸市ウェブサイト



参考情報

・八戸市議会：

<https://www.city.hachinohe.aomori.jp/gyoseijoho/hachinoheshigikai/index.html>

・女性チャレンジ講座（市民連携推進課）：

<https://www.city.hachinohe.aomori.jp/soshikikarasagasu/shiminrenkeisuishinka/danjokyo-dosankaku/2/4158.html>

・八戸市まちの魅力創生ネットワーク会議（政策推進課）：

https://www.city.hachinohe.aomori.jp/soshikikarasagasu/seisakusuishinka/shiminkatsudo_chiikikatsudo/1/18017.html